

# 沖ノ島

## 6世紀の古墳が残る伝説の島

長さ170m、幅60m、

鳴門海峡を臨む海に浮かぶ沖ノ島。

数多くの謎に満ちたこの島には

海上の武人であった一族が

お墓に眠っている。

南あわじ市で暮らす人たちの

先祖である古代の海人族。

塩づくり・土器づくり・古代米、

電気もガスも無かった時代の

これらの文化を、どう伝承するか。

子どもたちを前に、私たちは、

今、歴史の分岐点に立っている。



弥生時代、多くの人が  
憧れ続けた幻の島が、  
古代と今を結びつける。

伊毘うずしお村 堀 洋雄さん

松帆銅鐸が発掘され、淡路島が日本遺産に  
選ばれてから、注目度が高まっている古代。  
今から25年以上前にすでに古代の民である  
「海人族」の歴史を、地域の活性化の起爆  
剤として活用してきた人がいる!とお聞きし、  
堀さんに会いに行きました。

13基もの古墳が眠る  
全国でも珍しい島  
「沖ノ島」。

阿那賀伊毘(いび)港の前に浮かんでいる小さな島「沖ノ島」。こは、なんと島のすべてが海を生業とする一族の墓場でした。島には十三基もの古墳があり、鉄の刀や玉類などの一般的な副葬品の他にも、鉄製の釣り針や漁具が発見されています。こんな歴史の上でも貴重な島に、子ども頃から船で何度も渡っていたという堀さんは、「小学校の頃、先生が船の櫓(ろ)をこいで連れて行つたんや」と、自然な笑顔で話してくれました。「沖ノ島はな、王族の中でも選ばれた人だけしか墓を作れなかったという、特別な島やつたんやで」。

まちおこしの活動の  
キッカケは85年の  
大鳴門橋の開通だった。

淡路島と徳島県を結ぶ大鳴門橋が開通したのが1985年。この頃から堀さんは、伊毘のまちおこし活動をはじめたそうです。「高速道路のインターチェンジが南あわじにできる前、淡路島がただの通過点になってしまおうのではないかとという危機感を、強く感じたんや」。橋が開通する前、伊毘は四国に船で渡る人たちの宿泊の場だった。当時は洲本よりも宿泊者が多かった時代もあったんですって!

マスコミが注目する  
伊毘のまち。

まちおこしは、どんどん勢いを増していきました。当時、1学年100人以上もいた阿那賀の子どもたち(4年生・5年生)を沖ノ島に連れて行ったり、古代の儀式や海人(あま)族の歴史に詳しい考古学の専門家・岡本稔先生に教えてもらったり、PRの力を高めるために海人族のテーマ曲を作ったり、活動はどんどん広がっていきました。「野焼きの火がテレビ映える」ということで、全国からテレビの取材も数多く舞い込んできたんやで」と当時を懐かしく語る堀さん。活動は、いつしか全国の先駆的な事例として国の機関から表彰されるまでに広がっていました。

阿那賀の小学校の  
閉校を経て、  
次なる取り組みへ。

ウミホタルを見に行くツアー、古代米を地元の小学校と一緒に育てること、勢いを増す取り組みは、2005年の阿那賀小学校の閉校により、一時的に中断。でも、心の炎を燃やしつづける堀さんは、今でもキャンプ場を利用する修学旅行生に塩作りを体験してもらったり、ガールスカウトに土器づくりを伝えたり。伊毘の町の元気づくりとして、沖ノ島と海人の魅力を発信しつづけていらっしやいます。

